

プロローグ

かつてその戦争は「アメリカのいちばん長い戦争」と呼ばれた。長いあいだ、三〇年を優に超える年月にわたって、宿命的な響きとともにそう呼ばれた。宿命的というのはほかでもない、長びく戦争ほど誰にとつても命取りのものはないからだ。

戦争は長びけば長びくほど壮健な兵士たちの命を浪費し、暮らしに影を落とし、故国を分裂させる。例外はおそらく大国に押しひしがれた小国の場合で、そこでは強烈な外圧と化した戦争が社会と国家、民衆と権力者の結束を強め、損耗と貧窮を耐え抜く狷介けんかいな誇りや気概を人々のあいだにみなぎらせたりもするだろう。——ロシアの侵略に抗したウクライナがそうであるように。

けれどもアメリカ合衆国のような「超」のつく大国とその豊かな民にとつて、長びく戦争は積年の宿痼しゆくあに悩むのと同じ、不安や苛立いらだち、揉め事や相互不信の種となり、やがては自滅へと向かう途みちに彼らを追い込んでゆく。現にアメリカに取り憑ついたその長い戦争は、あれほどまで

に豪氣で鷹揚おうようだった社会の氣風を損ね、太平楽な自信に溢あふれた若い国家の威勢くじを挫くじき、のちのちまで消えることのない深々とした痛手を負わせたのである。

そんな「アメリカのいちばん長い戦争」が、ヴェトナム戦争だった。

だった、と過去形になるのは、いわゆる「9・11」同時多発テロへの報復戦争という名目で始まったアフガニスタンでの米正規地上軍による対テロ戦争が、二〇一〇年六月に通算で一〇四ヵ月間に達し、ヴェトナム戦争のそれを上回る「アメリカ史上最長」の戦争と認定されたからだ。が、そうなるまでも、そうなってからでも、ヴェトナム戦争はアメリカの歴史上最もユニークで忌まわしい教訓のひとつとして、いくたびも繰り返し想起されてきた。

たとえばヴェトナム戦争の直後から一九九〇年代に至るまで、アメリカではおよそ二〇年間にわたって、「ヴェトナム戦争症候群」シンドロームが国家の対外政策と国民の心意を執拗しつように脅かすトラウマの代名詞と見なされた。その間、一九九一年の湾岸戦争で米軍部隊が大規模に展開した機動戦の電撃的な完遂は、この「症候群の克服」をもたらす勝利として大いに自賛されたものの、ちょうど一〇年後の9・11同時多発テロのあとにはアフガニスタンとイラクふたつの戦線での不吉な戦争に突入したアメリカの行く末を案じて、再び戦争の「ヴェトナム化」が懸念される

ようになった。

しかもジョージ・W・ブッシュ政権下で始まったアフガン戦争が、その後誕生したバラク・オバマ政権にもそのまま持ち越されてヴェトナム戦争を越える年月に達すると、またもや呪わしい記憶が社会の脳裏に呼び戻され、そのあげく、彼の政権が始めたわけでもない戦争に「オバマのヴェトナム」という不名誉な呼び名までが冠せられた。そして二〇一七年、「アメリカ最優先」^{フーリスト}をキャンペーンに掲げて発足したドナルド・トランプ政権は、前政権がなんとか撤退方針を確定しようと苦心^{さんたん}惨憺した米軍のアフガン駐留を、選挙戦中の公約とは裏腹に継続・拡大する方針へとあっさり転換。のちには撤退方針へと転じたものの大統領の無責任なツイートなどが混乱を生じさせるばかりで、そのつどまたしても「史上^{ザ・ロンゲスト・ウォー}最長の戦争」という言葉が連日の報道で繰り返されることになったのである。

しかしそれでも終わりではなかった。今度は二〇二一年、就任もないジョー・バイデン政権のもとでアメリカ軍のアフガン撤退はようやく実現にまで漕ぎつけたが、あとを託したはずの現地軍と政権は事前の見込みを裏切ったたちまち崩れ去る惨状を呈し、またしてもヴェトナム戦争の記憶から「サイゴン陥落」の情景がまざまざと想起される羽目になってしまふ。

おそらくあの光景は、あのころも、いまも、これから先も、何度も繰り返し、事あるごとに

想起されることになるだろう。こうしてかつて「アメリカ史上最長の戦争」だったヴェトナム戦争の記憶は、いつまでもどこまでも、アメリカの行く末にすがりついてきたのである。

いまにして思えば、そもそもアフガン戦争が新たな「アメリカ史上最長」になったとのニュースが世界中の新聞やTVで一斉に報じられ、人々の耳目を集めたこと自体、いかに世界がとうの昔に終わったはずのヴェトナム戦争の故事を忘れていなかったのかを暗に物語っている。そして大統領が幾人代わろうと、合衆国が地球上のどこかで軍事行動を起こすたびに「ヴェトナムの教訓」が取りざたされるところにも、その強迫的な影がまわりつづけている証左の一端を見ることができよう。

けれども肝心なのはそこではない。というのもこれらが意味するのは、ヴェトナム戦争の「記憶」や「教訓」がいまなおアメリカ社会に生きているということではないからだ。むしろこれらの現象が物語っているのは、「ヴェトナムの教訓」がおよそ教訓になどなっていないという現実の、呆れるほどあからさまな反映にほかならない。現にもしそれが本当に生きた「教訓」であるのなら——つまりそこからなんらかの「教え」や「訓し」を汲み取ることができるといふのなら——これほどにまで役立たずのままであっていいはずがないのである。

一例を挙げよう。

しばしば言われるようにヴェトナム戦争は、歴史上まれに見るほどの反戦運動を世界的な規模で惹き起こした戦争だった。それはニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコ、ロンドン、パリ、ベルリンなど欧米の主要都市ばかりでなく、日本全国の都市部にまで野火のように広まる一方、知識人社会のあり方から庶民の政治姿勢までを大きく左右し、ジャーナリズムとマスメディアの役割と影響力にも、またこれ以後の各世代の若者たちの世界観にも、長く深々とした影響をおよぼした。いや、そのはずだった。

ところが冷戦崩壊後のいわゆる一極化の過程でその精神は急速に衰微し、さらに9・11以後の厄介な戦争への道行きの途上で決定的に頓挫、ついに「教訓」は換骨奪胎の憂き目に遭うことになってしまふ。

なにしろ「対テロ戦争」という聞き慣れない呼称のもとで根拠すら定かでないイラク開戦へと向かった大統領ジョージ・W・ブッシュは、再選に臨む選挙戦のさなか、強引な開戦姿勢を不安がる国民に向かって自身を「ヴェトナム戦争世代」と呼び、「ヴェトナムの教訓」を誰より深く知る世代のひとりである自分が、あの過ちを二度と繰り返すはずがないではないか、とまで大見得を切ったのである。その行き着いた先が、しかしみずからの大統領任期すら越えて

「アメリカのいちばん長い戦争」の不名誉な記録を塗り替えることだったというのならば……なにをかいわんやとは、まさにこのことだろう。

では果たして、ヴェトナム戦争の経験とは何だったのだろうか。それはアメリカの政治と社会と文化に何をもたらしたのだろうか。そしていまそれは一体いかなる意味を持ち得て——もしくは持ち得ずに——いるのだろうか。本書はこんな問いかけを念頭に、ヴェトナム戦争の「敗戦後」におけるアメリカ社会の歩みをたどる試みである。

ヴェトナム戦争はかつて確かに「アメリカ史上最長の戦争」だったが、その間に露わになったさまざまな予想外の過誤と蹉跌^{さてつ}、政治的分裂と社会的な苦悶^{くもん}は、むしろ戦争が終わってのち、戦時の何倍にもなる年月にわたって暗く、濃く、複雑な影響をもたらした。

「ヴェトナムの影」という言葉は一九八〇年代には時代の核心に触れるためのキイワードだったが、その響きが陳腐化し、聞き飽きられ、いつしか消えてしまったあともなお、ヴェトナムの曳^ひく長い影はさまざまに濃淡と姿を変えてアメリカ社会の集合的心性にまわりついてきたのである。その意味で本書はヴェトナム戦争論であるという以上に、「ヴェトナム戦後」論というべきかもしれない。

ただし本書の眼目は、ヴェトナム戦争とその記憶がいまなお大きな影響力を発揮していると主張するところにはない。というのも現今の情勢下での最も大きな問題は、既に触れたように、ヴェトナムにおける戦争の失敗と国家外交の蹉跌という苦い経験の歴史的な意義——すなわち教訓——が理解されず、事実上忘れ去られている、ということのほうにあるからだ。

実際、ほとんどすべての外国人にとって、米国がヴェトナム戦争でみじめな敗北を喫したことは明白な事実であるにもかかわらず、いまや「アメリカはヴェトナムに勝利した」と真顔で語るアメリカ人が少なくないという事実には驚かざるを得ないし、その数が年々減るところか、二一世紀に入ってから「知識人」と呼ばれるようなたぐいの人々にまでじわじわとその数を増やしていると聞けばなおさらだろう。彼らの言い分によれば、戦争から十余年経^たってドイモイ (Đổi Mới「刷新」) の名のもとに市場経済を大幅に導入したヴェトナムはアメリカ資本主義の軍門に下ったも同然ということになるのだが、この理屈はいかにも苦しく、かつ見苦しい。

それはしかし、超大国アメリカが幾度となく繰り返してきた無神経な独尊ぶりの表れというばかりでなく、ほぞを噛^かむ失敗で手痛い敗北と屈辱を味わった社会が、いかなる大国であれ小国であれ、集団的な怨嗟^{えんさ}をもてあましたあげくに陥る普遍的な錯誤の一例と見るべきだろう。

そしてまたヴェトナム戦争の過程で始まった深刻な政治論争と対立が——本書がこのあと徐々に明らかにするように——今日のアメリカ社会の目を覆うばかりの分断・分裂の源泉でもあることを知ればなおさらだろう。

現代の「分断」はしばしば南北戦争の内戦でアメリカ同士が対立し、殺し合った歴史と比較されるものの、それはあくまで修辭的な次元の話であって、直接のつながりと背景はヴェトナム戦争当時のそれにほかならない。

裏返していうなら、愚かしい浅慮の産物と見える現在の錯誤的な現象にこそ、負けた戦争の遺恨をめぐる歴史の普遍的な教訓を見ることができはずなのである。そしてそれこそが、終わったはずの「アメリカ史上最長の戦争」の記憶がいまなお更新されつづけているという現実のわけを知る——たぶん真の意味での——教訓なのだ。

ヴェトナム戦争からアフガニスタン戦争へ。ふたつの「アメリカのいちばん長い戦争」のあいだとその後起こったことは果たして何なのか。そこでは何が起り、何が残され、何を残し得ず、そして世界はどう変わったのか。本書はその大きな問いへの答えを考えるための、小さな試みである。